

「映画制作とその制作過程における分析」

熊谷由紀

本論では、映画制作における脚本を書くことから、撮影、映像の編集を通し映画として一本の作品が出来上がるまでの制作過程を分析したことを書きとめる。これにより、映画を制作する立場を理解し、映画に対する見解の幅を広げる事を目的としている。

はじめに、10～15分の映像作品を制作する事とした。脚本の枚数としては1枚を400字として、脚本1枚に対し、映像作品1分と仮定して脚本を書く事とした。

脚本を書く段階でまず、プロットの縦糸作りから始めた。「作家志望の女性が作品を書く事に行き詰まり、放浪するうちに不思議な人物に出会う」という大枠である。このプロットにいくつものエピソードを加えていく事にした。それと同時に登場人物とその人物の性格などを決めていった。話が大体4日間の中の出来事と想定し、場所によって変わるシーンをいくつかに分けていった。

脚本が出来上がると、次に絵コンテを描いていった。絵コンテは、実際に撮影する時に必要となるものである。絵コンテの役割として、監督の映像的アイデアをカメラマンやスタッフおよび役者に伝えることと、映像を撮り終わった後の編集に役立つ事などがある。絵コンテは、脚本で各シーンに分けたものをさらに1コマずつカットとして描いていく。絵で役者の立ち位置や動作、撮影したい風景を描いていった。また、役者のセリフや音楽、効果音などの音に関する事も書き加えていった。これにより、何シーンの何カットの時に音楽を入れるという事などが編集の際に容易になった。

実際に現場で撮影を開始する段階になると、撮影現場を事前に下見しておかなくてはならなかった。周囲の雑音はどのくらい大きいのか、人や車の通りは多くないか、光の照り具合はどうかなど、スムーズに撮影する為には様々な事を前もって調べておく必要があった。実際に撮影に入っても、突然アクシデントが起こったりすることもあり、その対処に絵コンテが役立った。さらに何度も撮り直しをしたり、どうしてもうまくいかない所は削除して他の場面と入れかえたりという事もあった。

撮影が完了し編集に入ると、パソコンの編集ソフトを使ってカットを繋げたり、映像と音声を合わせたり、音楽を入れたりという作業を繰り返した。最後には役者やスタッフの名前をエンドロールとして入れる作業をした。編集には撮影の約3倍の時間がかかり、大変苦労した。

以上の結果、脚本が11枚となり、映像作品は約11分となった。撮影の段階で、脚本にある事を削除したり、あるいはその反対に新たに加えることもあった。短い時間の映像作品であったものの、企画の段階から様々な作業を繰り返し、かなりの時間をかけて完成に至った。考えを頭に浮かべていても、それを映像に表すことの難しさを痛感した。映画というものは自分以外の人が観る時の事を考えての作品制作が大変困難である事も理解できた。映画制作という作業は、このような複雑な行程を経て作られるものであり、この作業だけに終始する時、多分に自己満足に陥る事があるので、今回の卒業制作では、完成した作品が不特定多数の人々に観られて評価されるメディアでもあるのだという事を再認識させられた。